

「はいろ」に関わる全てのひとへ

# HAIRONGA

ハイロニア

仕事が結ぶ、人と人。



経済産業省  
資源エネルギー庁

# 「廃炉に挑む」。それは世界初の技術が生まれることでもあります。

## CONTENTS

PAGE 3-4

三菱重工業株式会社

Takeshi Ueda / Youhei Uemoto / Yoshihiro Tsujita



01

PAGE 5-6

日立GEニュークリア・エナジー  
株式会社

Shinya Oyama



02

PAGE 7-8

日本原子力研究開発機構  
大熊分析・研究センター

Maya Akimoto



03

PAGE 9-10

株式会社 安藤・間

Takeshi Suto



04

PAGE 11-12

東芝エネルギーシステムズ  
株式会社

Ichiro Tokura / Tsukasa Suwazono



05

PAGE 13-14

東京大学  
大学院工学系研究科

Koji Okamoto



06

PAGE 15-16

福島廃炉関連産業  
マッチングサポート事務局

Toshiaki Kokubun / Shu Nagahisa

株式会社 木村管工

Minoru Ootaka

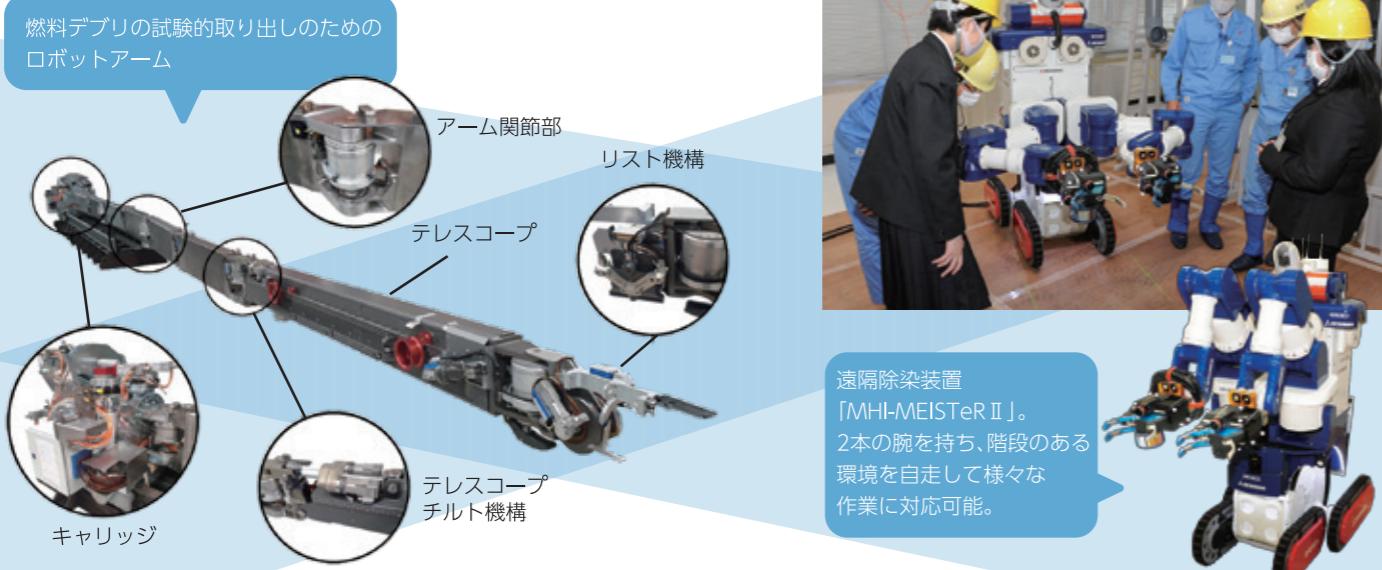


07



福島第二原子力発電所の廃炉という、  
未知の試みに知恵を絞り、  
繰り返しながら、トライアンドエラーを

廃炉を達成しようとしている、  
そんな方々を福島高専生の  
目線からご紹介いたします。



\ 力を合わせて難問も解決！ /



今回、私たちがインタビューをしたのは東京電力福島第一原子力発電所（以下福島第一原発）の収束安定化に取り組む三菱重工業だ。同社は、国内の原子力全般に貢献するため、技術的にハードルの高い燃料デブリ取り出しに関わる研究開発プロジェクトに国際廃炉研究開発機構（IRID）の一員として参画し、福島第一原発2号機で使用される燃料デブリの試験的取り出し装置の開発を行っている。

実際に装置の開発が行われている三菱重工業神戸造船所へ伺い、プロジェクト関係者へのインタビューや工場の見学をさせてもらった。直接お話を聞くこと、福島から神戸への大移動と、ついで楽しみはどうながらか、インタビューをするということで緊張しながら新幹線へ乗り込んだ。緊張とワクワク感から新幹線での旅は一瞬で、すぐに神戸へ着いてしまったよ

造船所の中へ入つてみるとそこは一つの町のように広く、施設・設備が整つていて非常に驚いた。インタビューの会場へ移動すると、そこにはたくさんの人が集まつており、さらに緊張が高まつた。

多くの関係者に集まつていただく中、緊張する私たちのインタビューに答えてくださつたのはエンジニアの上田剛史さん、辻田芳宏さん、植本洋平さんの3人だ。彼らは、福島第一原発の格納容器内部調査や燃料デブリ取り出しのためのロボットアーム開発のプロジェクトを担当している。ロボットアームの開発は、イギリストのOTL Nuclear Solutions UK（通称：OTL）社の協力を仰いでいるところともあ

り、「開発にあたつての調整作業では、英語でのWeb会議やイギリスへの出張などもあつて日々忙しい」と大変そうながらもどこか楽しそうに話してくれた。

またこのプロジェクトを進める上で特に大変なことは、格納容器内部についての情報が少なく、前例もないために、現状起つている問題点やこれから考えられる課題を全て洗い出し、一つずつ解決していく工程が必要ということがわかった。誰もやつしたことのないことに挑戦しているため困難なことも多いが、力まずに目の前にある課題を一つずつ解決していくことが大切だ。

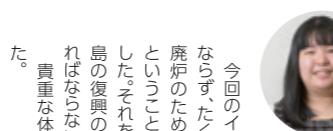
そしてその検討の積み重ねが目に見える形で結果に繋がつていくことは嬉しい限りがいを感じる。我々は原子力プラントメーカーとして長年培ってきた原力技術を福島第一原発の廃炉に役立てたい」と語る彼らからは、日本の原子力の安全を支えたいというエンジニアとして使命感のようなものが伝わってきた。

今回、初めて福島第一原発の廃炉のために活動してくださつていている方々と直接お話をできたのは貴重な体験となつた。特に、震災後もずっと福島県で過ごしてきたのにも関わらず、福島第一原発の現在の状況や復興の進捗など、知らない部分が多くあり、まだまだ学んでいかなければならぬことが多いことを痛感した。また、三菱重工業の方々とお話を聞いてみて、福島第一原発のみならず、日本の原子力発電所の安全を支えるための研究・開発といふのは私たち若者が先陣を切つて行動していくしかければならないことだと改めて感じた。今回のことを今後の学習にも活かしていきたい。

\ ありがとうございました /



高橋  
那南



金成  
優衣

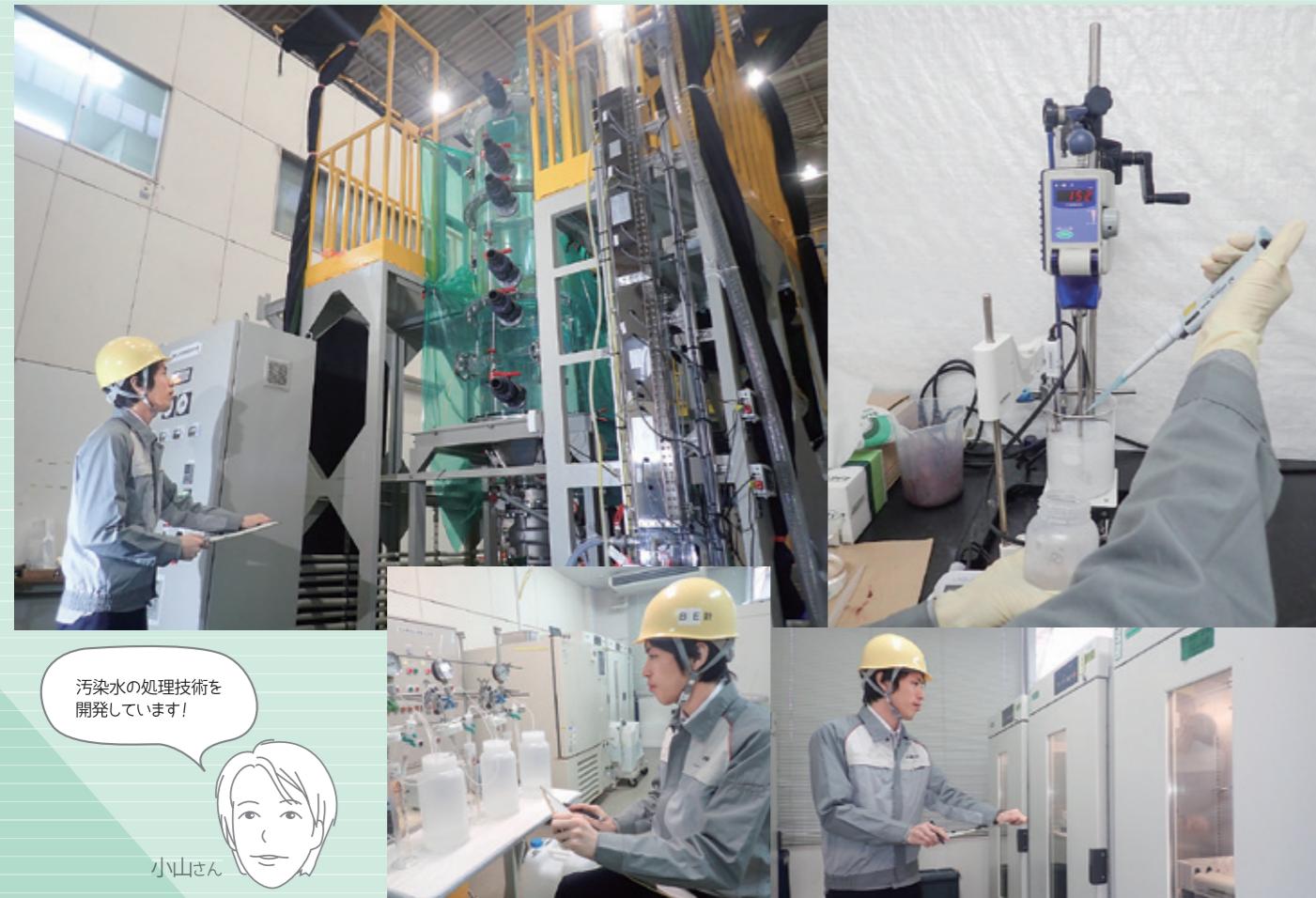
インタビューを終えて



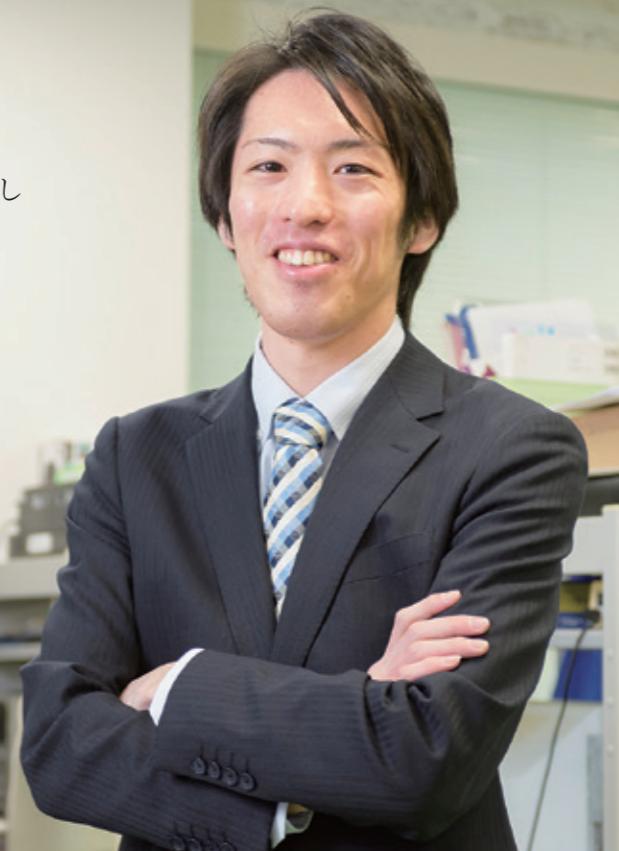
遠隔除染装置  
[MHI-MEISTeR II]  
2本の腕を持ち、階段のある環境を自走して様々な作業に対応可能。

「自分たちがやってきたことが、目に見える形になっていく。  
それが、私たちのやりがいです。」





「廃止措置のため、  
それぞれの考え方を理解し  
調和を図っています。」



日立GEで設計者として働いている小山伸也さんは、現在福島第一原発の廃止措置のプロジェクトを進めている。小山さんは僕たちの学び舎である福島高専の卒業生で、当時の様子や学生生活について語ってくれた。福島高専の寮で生活していた小山さんは、「一年生の時に東日本大震災を経験した。大震災を間近で感じて、福島復興のための仕事に就こうと決意した。在学中に廃炉について勉強し、日立GEに就職したそうだ。

小山さんの日頃の業務は、メーカーとして汚染水の処理のための設備や処理方法の提案・設計、燃料デブリ取り出し段階で発生する汚染水の処理技術の開発汚染水処理技術の模擬試験の取りまとめが必要があり、それに対応した処理方法を開発しなければならない。私たちが違う。私たちのOBが難題に果敢に取り組んでいると知って福島高専の学生としてとても誇らしく、自分たちもこのような難題に取り組めるような知識と技術を身に着けようと思った。

さらに日頃の業務を進めていくうえで苦労した点を聞いてみると、「今行っている廃炉のプロジェクトそのものが困難なものであるため、関わる人が多く、取り組んでもいるため、関わる人が多く、取りまどめられていて、なかなか話を詳しく聞くことができない」と、小山さんは、これまでの経験から得た知識を活かして、問題解決に取り組んでいます。

「これが大変です」と深く語った。学校生活では部活動や課外活動などでグループを取りまとめる機会が少なからずあるので、取りまとめて行うにあたっての苦労は理解しているつもりだったが、小山さんは取りまとめているグループの規模は比べ物にならない程大きく、その苦労も遙かに大きいものなのだということが伝わってきた。

私たちちは今まで廃炉の知識や現状などをほとんど知らず、廃炉に携わる方々との交流も今回のインタビューが初めてだったので、燃料デブリの取り出しに向けた取組みや廃炉作業がどの程度進行しているのかなどを詳しく知ることのできた。福島第一原発の廃炉について私たちがこれまで知ることのなかった部分が多くあり、このインタビューを通じてもっと廃炉について理解を深め、インタビュー前の私たちのような廃炉について知らない人へ伝える必要があると考えさせられた。高専卒業生が実際に活躍している様子を本人から聞いて、これからは高専という恵まれた環境にいることを日頃から考え、より一層勉学や課外活動に励み小山さんのような各地で活躍する高専OBになりたいと思つた。

最後に福島や日本、未来への想いを質問すると、「福島第一原発の事故のように、ではなく他のことにも役立つはずなので無駄にならないよう未来へつないでいつほしいですね」と未来への想いを語った。

\ありがとうございました/



伊藤 隆尚  
福島高専  
機械システム工学科2年

インタビューを終えて

私は現場の設備の設計を行なう小山さんは、未だ知らないものが多く、とても困難で長期的なものになるのだと思いつつ、インタビュー自体緊張しながらも貴重な経験ができました。インタビューの内容とは関係ないのですが、福島高専の卒業生である小山さんは福島高専の先輩として、小山さんの高専生活などについての質問もできとても充実していました。



## COMPANY INFORMATION

日立GEニュークリア・エナジー(株)

住所:〒317-0073  
茨城県日立市幸町三丁目1番1号【東京本社】  
住所:〒101-8608  
東京都千代田区外神田一丁目18番13号  
(秋葉原ダイビル)  
HP:<https://www.hitachi-hgne.co.jp/>



私たちがインタビューをしたのは、日本で唯一の総合的原子力研究開発機関である、日本原子力研究開発機構（JAEA）の大熊分析・研究センターで働いている秋元さん（2018年入社）だ。放射性廃棄物や燃料デブリの性状分析・評価などをを行い、それらを処理・処分する際に必要なデータを収集するという、将来の廃炉作業に向けた重要な役割を担っている。秋元さんは、以前は他の企業に勤めていたが、社会に貢献をしているという実感が無かつたため、地元福島の復興のために力を尽くし、復興に貢献できる仕事に就きたいと思い転職した。そこでは、放射性廃棄物や燃料デブリの処理・処分時に必要となる情報を「どのように分類して、どれくらい詳しく分析しなければならないのか」という計画（分析計画法）を立てることを主として様々な仕事をしている。

インタビューを行う前に、今後、放射性廃棄物の性状分析を実施する際に活躍することになる設備のワークショップを体験させていただいた。

＼ありがとうございました／



伊藤 隆尚  
機械システム工学科2年

大熊分析・研究センターに向かう道には男性の作業員の方がとても多くいましたが、秋元さんが所属する分析部には女性の方が多いとインタビューの際に伺い、廃止措置というものは女性も活躍することのできる仕事なのだと驚きました。

私は原子力に関わる言葉をスガティップに捉えていた人の1人であったが、秋元さんの回答を聞いて、廃炉や原子力に携わるということは世界各地で活かすことが可能な経験ができるだけでなく、新しい技術を生み、そして扱えるという日本の中でも多少ない職場なのではないかと考

インタビューを終えて



鈴木 拓将  
福島高専  
機械システム工学科4年

今回のインタビューでJAEAが地元福島県内でどのような研究をしているかが分かり、また、多くの人が原発事故収束に向かって進んでいる事が分かったことがうれしく感じました。またインタビューに応じていただいた秋元さんの熱意が良くなわり、とても感動しました。もともと原子力関係の進路を希望していましたが、さらに原子力分野に進みたいと思いました。



日本原子力研究開発機構  
大熊分析・研究センター

× 分析部 分析計画課

秋元 茉耶  
あき もと まや



### COMPANY INFORMATION

日本原子力研究開発機構  
大熊分析・研究センター

住所:〒970-8026  
福島県いわき市平字大町7-1  
平セントラルビル8階(いわき事務所取扱い)  
HP:<https://fukushima.jaea.go.jp/>





### COMPANY INFORMATION

安藤ハザマ富岡事務所  
住所:〒979-1111  
福島県双葉郡富岡町大字小浜中央228  
HP:<https://www.ad-hzm.co.jp/>



「作業員の安全を第一に。  
自分が背負う責任に  
真摯に向かい合い対応しています。」

## 04

株式会社 安藤・間

すとう  
須藤 武  
たけし



福島第一原発に向かう道中、震災当時からそのまま放置され、ガラス張りの壁が崩れたカーチョップや傾いた住宅があり、本当に復興は進んでいるのか不安になつた。

福島第一原発の敷地内に入つてすぐの施設には、様々な企業の名前が並んでおり、多くの人や企業が一丸となって廃炉作業に取り組んでいると感じる一方で、厳重なセキュリティや、見学に必要な装備を着用することに緊張した。線量表示器付きのバスにのり、施設の見学を行い、様々な場所について説明を受けた。福島第一原発に近づくにつれて線量表示器の値が急に上昇し、安全な値だと分かっていても少しの恐怖心があった。福島第一原発を高台の上から見下ろすとともに大きいパイプや、1号機のむき出しになった鉄骨を見て、映画のワンシーンを見ているような気分になつた。

その後安藤ハザマさんが建設した処理水貯蔵タンクの見学を行つた。貯蔵タンクはとても大きく、タンク1基当たり約1,000トン以上のアルプス処理水を貯蔵できることを知り驚いた。アルプス処理水が貯蔵タンクから漏れ出ないための様々な対策をしていることや、福島第一原発に向かう途中で見た以前の貯蔵タンクを見て、技術の進歩を感じ、復興に向けて着々と進んでいる事を実感した。

見学の最後にアルプス処理水の実物を見せてもらった。見た目は「水道水」と変わらず、放射線量も少ないことが意外だった。

今回インタビューを受けてくれたのは、安藤ハザマの須藤さん。須藤さんは作業者100人の先頭に立ち、処理水タンク製作の進捗管理や現場監督を行つていった。インタビューの中では、一番苦労し

たので家族にも猛反対されたが、仕事のやりがいや誇りを優先した」と苦笑を浮かべる場面も見られた。作業している中で廃炉の進展を一番感じたのはどのようないふたつが、という問い合わせて須藤さんは、「普通に人が構内を歩けるようになったことで、敷地内にコンビニエンスストアなどと、当時の作業風景と現状での比較や会話の中で真剣に伝えてくれた。

最後に、「こんな大惨事から復活した『奇跡の町』となって欲しい」という言葉があり、震災直後からここまで頑張ってくれた方々から我々若者が跡を継ぎ、奇跡の町創りのために活動しなくてはと深く考えさせられた。



機械システム工学科4年  
鈴木 拓斗



機械工学科5年  
中田 陸斗

インタビューを終えて

今回、原子力発電所の事故収束の最前线で働く人の話を聞く事ができとても勉強になりました。また、貯蔵タンクの製造に高専で学んだ技術が使われていたこと、これからの学習に対してより真剣に受けたいと思えるようになりました。

そして、須藤さんの話から自分の仕事をに対する誇りが伝わってきて自分も自分が誇りに思える仕事に就きたいと思いました。

現在大きな問題となっている処理水に関する業務に携わる安藤ハザマで働く方のお話や福島第一原発の施設見学などを通して、廃炉の進展を実感すると共に今後の未来について若干の不安と大きな好奇心が芽生えました。

自身の知識も蓄えられると共に、将来の選択肢が広がったこの機会にとても感謝しています。



**インタビューを終えて**

**関根 正純**  
福島高専 機械システム工学科3年

もともと原子力産業に興味を持っていましたが、今回のこのインタビューを終えて更に将来この産業を支えていきたいと強く思うようになりました。最先端の現場で使用されている技術が、自分たちが学んでいることの延長線上にあるということに驚き、より一層今学んでいることに懸命に打ち込むうついました。インタビューで聞いた「なつか一つ得意なことを持つことが大切」というお話を通り、自分も何か一つのことを極めて、将来に活かしたいと思いました。貴重なお話、体験ができるて本当に良かったです。

**大野 陽生**  
福島高専 機械システム工学科2年

東芝を独自の技術や実際に廃炉を使ったロボットを間近に見ることができたとても興味深かったです。緻密な計画を立てて廃炉作業を進めていることを改めて知ることができました。とても貴重な経験ができました。

\ありがとうございました／

高専からマイクロバスに揺られるごと約3時間、ようやく見えてきた東芝エネルギー・システムズ株式会社。その規模の大きさと迫力に福島からの移動の疲れを忘れ大興奮した。

遠く離れた横浜の地で巨大な発電用タービンを目の前に私達を迎えてくれた東芝エネルギー・システムズ・原子力機械システム設計部の東倉一郎さん、諏訪園司さんは「誰もやったことない世界初の仕事にやりがいを感じている」と語る。

原子力プラントの建設・メンテナンス・稼働対応から福島第一原発の廃炉対応・廃止措置対応、燃料サイクル、さらには次世代炉や高速炉などの未来事業領域に積極的に取組みを行っている。大学が原子力工学専攻で原子核など目に見えないところに興味を持った

と言う東倉さん。海外の仕事を経験し2年目の実習で福島第一原発に行つた直後に震災が起きた時から福島第一原発の仕事に携わっている。「すべてが初物なのでどこから手を付けたらよいのか分からなかった。どこまで準備したこと。また、自分が手掛けた原子力発電のプラントが悲惨な状態に陥ってしまった非常にショックを受けたと話してくれた。

しかし東倉さん、諏訪園さんを初め、技術者の力もあり福島第一原発の廃炉作業も着実に一歩ずつ進んでいる。時間の経過とともに、マスクをつけなければならぬ範囲や現場の環境は震災直後に比べ大部変わってきた。大臣がマスクを外し現場付近まで入るところや瓦礫が撤去されていくところに進展を感じるそつだ。

「メディアで報道される福島第一原発の様子についてはあまり良い印象を受けないが、こう報道するメディアをどう思うか。こんな質問をぶつけてみた。「メディアが言っているのは全てではないと感じている。批判も感じるが、見えないとこもたくさんあり、従事する人たちは日々頑張って廃炉に向かって一生懸命やっている。この現場の状況を見ているので批判に対し考え方で見せられることもある。」とメディアの方について考えさせられる言葉だった。

原子力について語っているお二人の目は真っ直ぐでとても輝いていた。そこからは仕事に対する誠意が伝わってくる。「何か一つ強みを持ち、仕事を楽しんでできる人」が理想的な技術者像であるといふ言葉を真摯に受けとめ夢に向かって頑張っていきたい。

「完璧な100%はありえない。  
どこまでのパフォーマンスを  
発揮することができるのか、それが重要。」

**COMPANY INFORMATION**

東芝エネルギー・システムズ株式会社  
機械エンジニアリングセンター  
住所:〒235-8523 横浜市磯子区新杉田町8  
HP:<https://www.toshiba-energy.com/>

**原子力機械システム設計部  
主務 東倉 一郎**

**原子力機械システム設計部  
主査 諏訪園 隆尚**

今回、東京大学で原子力を研究する方にインタビューする機会を頂いた。お話を伺ったのは、東京大学大学院工学系研究科原子力専攻教授の岡本孝司先生と同大学原子力国際専攻特任助教のペレグリニ・マルコ先生、岡本先生の研究室に所属する修士1年の横山開さんの3名だ。感染症の予防と拡散防止のためウェブ会議形式での開催となり、始まる前は東京大学の赤門や普段の研究で使正在している機器などを実際に見ることが叶わないと残念に思ったが、始まってみると時間の限り様々な質問を聞くことができ、充実した時間であった。

岡本教授は主に熱流動、例えば放射線と沸騰の関係などの研究を、横山さんはジオポリマーの特性やそれを利用した燃料デブリの取り出し方法の研究、マルコ先生は流体力学のシミュレーション解析を行っていると聞いた。なぜ廃炉に関わる研究を選ばれたのかという質問に対し、岡本先生は事故当時イギリスにてそこで事故の様子を知り、その際になんとかしなければという思いから、廃炉に携わるようになつたとのことだった。また、3人とも廃炉に関する研究することに対し周囲から何か言われることはなかつたとのことだつた。また、3人とも廃炉に関わる事故を経験している福島の人々は風評被害などからマイナスのイメージを持たれやすく、生活をしていてもそれを感じることが多々あつたためだ。

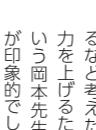
福島の未来への想いを伺うと、岡本先生は、「目に見える復興があり活気が戻ってきているように感じるが、

一方で産業の方は依然として活気が無いように感じる。そこで、イノベーションコード構想で新しい産業を生み出すことがさらなる復興へと繋がる力が気になるのではないか、産業が戻つてくれば必ず人は戻ってくる」と語り、なかでも「廃炉はまだまだ終わらないが、確実に進んでいることは間違いない、この歩みを止めてはいけない」という言葉が印象的であった。また、若い世代への思いとして、事故を起こしてしまった責任は自分達の世代にあり、負の遺産として残してしまうことに後悔を滲ませていたが、一方で、仮にこの事故を技術力を上げるプロジェクトと捉えた場合、宇宙産業にも匹敵する大規模なプロジェクトと考えることができ、ここで開発され、活躍する技術は別分野でも活かされる可能性があるため、諦めずに研究を続けてほしいと語った。横山さんは廃炉をやり遂げ、住民の希望を明確にした上で行政がサポートをできる環境になるため、諦めずに研究を続けてほしいと語り、電力の問題は電力を使用する日本国民全員の問題でもあるため、国民全員が当事者意識を持つべき問題であると訴えた。

今回研究に携わる方々から異なる視点の考え方聞くことができ、つくづく問題であると感じた。大学で原子力を志していても、実際に原子力関連の職に就職することは少ないと聞く。原子力というとあまり良いイメージを持たず関心が少ないと感じることが多いため、廃炉を進めていくために若い世代を取り込む何らかの魅力を作ることが急務ではないかと感じた。



金成 優衣  
機械システム工学科4年



馬目 由季  
機械システム工学科4年

インタビューを終えて

今日は、廃炉や原子力関連の研究をしている東京大学の岡本先生マルコ先生、横山さんへ研究内容や研究の難しさなどをオンラインでインタビューをしました。新型コロナウィルスの影響により直接のインタビューをすることが出来なかつたことは非常に残念でしたが、廃炉や原子力関連の学習をしている私にとって今回のインタビューはとても勉強になりました。インタビューでは、廃炉のためのサポートや装置の技術開発は、基本となる研究者の研究結果があつてこそ産み出されることを再認識させられました。これから技術者となっていく高専生にとっては忘れてはならないことなのではないかと強く感じました。貴重な体験をありがとうございました。

岡本博士の下で原子力の研究と勉強をしています

原子力や廃炉技術の研究をしています

横山さん  
マルコさん  
岡本さん



「原子力の研究に携わり30年。  
研究結果が実現され、成果を生むことが私の喜びです」

おか もと こうじ  
岡本 孝司

06

東京大学 大学院工学系研究科 × 東京大学 大学院工学系研究科 原子力専攻 教授・工学博士



「企業と企業を結ぶ懸け橋として  
福島の復興を、廃炉を応援していきたい」

株式会社 木村管工 × 福島廃炉関連産業マッチングサポート事務局

国分さん  
廃炉事業参入のための  
お手伝い等をしています

長久さん

#### [マッチングサポートの流れ]



相談内容に応じて各種サポートを行います

- ・コーディネート支援
- ・マッチング機会の提供
- ・廃炉スタディツアー
- ・各種研修会・説明会の開催



地元の企業では廃炉に対して、どのような取り組みを行っているのだろうかと胸を膨らませながらインタビューに臨んだ。

福島イノベーション・コスト構想推進機構の国分敏明さん（福島イノベーション・コスト構想推進機構）と長久修さん（福島相双復興推進機構）にお話を伺った。

福島イノベーション・コスト構想推進機構は、東日本大震災及び原子力災害によって失われた浜通り地域の産業回復のために、新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクトで、お二人は、その中の福島第一原子力発電所の廃炉に関する取り組みを重点的に行っているそ�だ。

福島イノベーション・コスト構想推進機構は、地元企業に協力を求める際に、地元にどのような企業があるのか把握ができるかわからない、また相談窓口もないといった状況であった。このような状況に入りたくてもどこに相談してもよい分からない、また相談窓口もないといった状況であった。このような状況に入りたくてもどこに相談してもよいられないかと考え、地元企業の廃炉関連企業の参入支援を行うため、福島イノベーション・コスト構想推進機構、福島相双復興推進機構、東京電力HDが連携し、2020年7月からマッチングサポート事務局が立ち上げられた。「マッチング促進を通して、地元企業が廃炉産業に参入して、企業が成長して、その技術力で宇宙分野などにも進出できれば将来的により良い地域になると感じている」と希望に満ち溢れた様子で語ってくれた。

続いて、インタビューをしたのは、レーザー加工機を用いて、金属キャスク内の使用済燃料を数十本保管する格子状の部品を作成するなど、福島の復興に積極的に協力している木村管工である。もともと工場は楢葉町にあり、富岡町に本社があった。長年原子力に携わってきたため、地元に恩返しがしたいという思いがある。今後は加工・溶接技術を活かしたものづくりで貢献できればと考え、廃炉ビジネスに参入したチャレンジ精神のある企業の一つだ。もともと配管の製作や据え付けが主な業種であったが、レーザー切断や収納缶等の設計・製作の分野に進出し苦労して技術を習得してきた。今後は、これまでの経験を活かし、廃炉に関わる部品の製作なども進めたいといふことである。

今後若い技術者が福島に来てもらうためには何が必要かと聞くと、「若い人が福島をどのような場所と思っているか知りたいと思う。地元に恩返しができるよう取組みを行っていことがある」と答えた。この回答があつた。私たちも出来ることから少しずつ、現状を知つてもらえるような行動をする必要があると感じた。

れた様子で語ってくれた。

続いて、インタビューをしたのは、レーザー加工機を用いて、金属キャスク内の使用済燃料を数十本保管する格子状の部品を作成するなど、福島の復興に積極的に協力している木村管工である。もともと工場は楢葉町にあり、富岡町に本社があった。長年原子力に携わってきたため、地元に恩返しがしたいという思いがある。今後は加工・溶接技術を活かしたものづくりで貢献できればと考え、廃炉ビジネスに参入したチャレンジ精神のある企業の一つだ。もともと配管の製作や据え付けが主な業種であったが、レーザー切断や収納缶等の設計・製作の分野に進出し苦労して技術を習得してきた。今後は、これまでの経験を活かし、廃炉に関わる部品の製作なども進めたいといふことである。

今後若い技術者が福島に来てもらうためには何が必要かと聞くと、「若い人が福島をどのような場所と思っているか知りたいと思う。地元に恩返しができるよう取組みを行っていことがある」と答えた。この回答があつた。私たちも出来ることから少しずつ、現状を知つてもらえるような行動をする必要があると感じた。

**COMPANY INFORMATION**

株式会社 木村管工 楢葉工場

住所:〒979-0601 福島県双葉郡楢葉町 大字波倉字細谷134-2 HP:<http://kimura-kanko.co.jp/>

ありがとうございました！

馬田 由季

福島高専 産業技術システム工学科専攻 化学バイオ工学科1年

高橋 那南

福島高専 機械システム工学科4年

木村管工の方は、小さな会社でも日々多くの力を合わせて福島の先端産業の発展を目指す気持ちや、福島廃炉関連企業のマッチングなどのプロジェクトの取り組みに、感謝を受けました。多くの企業の方々の力を合わせて、大きなものが生まれ、より明るい福島になつたらしいなと思いました。

インタビューを終えて

**COMPANY INFORMATION**

福島廃炉関連産業 マッチングサポート事務局

公益財団法人 福島イノベーション・コスト構想推進機構内(廃炉関連産業集積課)

住所:〒960-8043 福島県福島市中町1番19号 中町ビル6階 HP:<https://hairo-matching.jp/>

**三菱重工業株式会社**  
神戸造船所

住所:〒652-8585  
兵庫県神戸市兵庫区  
和田崎町一丁目1番1号  
HP:[www.mhi.com/jp/](http://www.mhi.com/jp/)

**日立GE  
ニュークリア・エナジー(株)**

住所:〒317-0073  
茨城県日立市幸町三丁目1番1号

【東京本社】  
住所:〒101-8608 東京都千代田区外神田  
一丁目18番13号(秋葉原ダイビル)  
HP:<https://www.hitachi-hnco.co.jp/>

**日本原子力研究開発機構  
大熊分析・研究センター**

住所:〒970-8026  
福島県いわき市平字大町7-1  
平セントラルビル8階(いわき事務所取扱い)  
HP:<https://fukushima.jaea.go.jp/>

提供/日本原子力研究開発機構

**安藤ハザマ  
富岡事務所**

住所:〒979-1111  
福島県双葉郡富岡町大字小浜中央228  
HP:<https://www.ad-hzm.co.jp/>

**東芝エネルギー  
システムズ株式会社**  
機子エンジニアリングセンター

住所:〒235-8523  
横浜市磯子区新杉田町8  
HP:<https://www.toshiba-energy.com/>

**東京大学**  
シビアアクシデント・原子力安全・  
ビジュアリゼーション研究室  
(岡本・鈴木・エルカン研究室)

住所:〒113-8656  
東京都文京区本郷7-3-1  
HP:<https://www.vis.t.u-tokyo.ac.jp/>

**株式会社 木村管工**  
福島工場

住所:〒979-0601  
福島県双葉郡楢葉町  
大字波倉字細谷134-2  
HP:<http://kimura-kanko.co.jp/>

**福島廃炉関連産業  
マッチングサポート事務局**  
公益財団法人 福島イノベーション・コスト  
構想推進機構内(廃炉関連産業集積課)

住所:〒960-8043  
福島県福島市中町1番19号  
中町ビル6階  
HP:<https://haiiro-matching.jp/>

## Message メッセージ

この冊子は、福島第一原発の廃炉にさまざまな形で貢献されている方々のお姿を、学生の目を通してお伝えすることによって、より多くの方に廃炉の「いま」を知っていただきたい、という思いのもと作成いたしました。

東日本大震災、そして福島第一原発事故の発生から10年が経過する中で、廃炉はまだまだ道半ばではあるものの、着実に進展を見せています。

経済産業省資源エネルギー庁は今後も、地元をはじめ多くの方のご協力をいただきながら、前面に立って廃炉に取り組んでまいります。

最後に、この場をお借りして、インタビューにご快諾いただいた皆様、そして本冊子の作成に多大なご協力をいただいた福島高専の皆様に、心より御礼申し上げます。

## 経済産業省 資源エネルギー庁



福島高専 機械工学科 5年  
**中田 陸斗** Rikuto Nakata

インタビューの際、福島第一原発の現状も視察することができましたが、実際に自分の目で確認することと現地で働く方の話を聞いて、復興・廃炉の進捗をじかに感じることができました。

福島高専 機械システム工学科 4年  
**金成 優衣** Yui Kanari

今回、新型コロナウイルスの影響によりオンラインでのインタビューなど、イレギュラーなこともあります。しかし、沢山の方から様々なお話を聞くことができたのは非常に貴重な経験となりました。この経験を将来に活かせるよう、今まで以上に学業に励みたいと思いました。

福島高専 機械システム工学科 3年  
**関根 正純** Masasumi Sekine

今回、東芝エネルギーシステムズでの取材内容を編集させて頂きました。取材の時はいかに話を掘り下げるか必死になりながら質問や意見を考えていました。貴重な話や自分の知らないかったこと、皆さん伝えたいことを得ることができ良かったです。

福島高専 機械システム工学科 2年  
**大野 陽生** Yosei Oono

僕はこれまで廃炉事業に関して無知に等しかったのですが、今回のインタビューを通じて廃炉に関するいろいろな情報を新たな知識として学ぶことができました。今後も挑戦を続けてたくさんのこと学びたいと思います。

福島高専 産業技術システム工学専攻  
化學・バイオ工学コース 1年  
**馬目 由季** Yuki Manome

2件取材を担当しましたが、両方で廃炉や復興には若い世代が必要であり、福島や廃炉に関心を持ってもらうことが重要だという話が挙がったことから、どうすれば関心を持ってもらえるのか考えるきっかけになりました。

福島高専 機械システム工学科 4年  
**鈴木 拓将** Takumasa Suzuki

今回はインタビューや記事の作成などほとんどのことが初めて行うことだったので、とても新鮮に感じました。この記事が福島第一原発の事故の収束に少しでも役に立つ事ができれば本当にうれしいです。取材させていただいた企業の皆様ありがとうございました。

福島高専 機械システム工学科 2年  
**伊藤 隆尚** Takanao Ito

私は今回のような機会を通して、今まで知ることのできなかつた廃炉に携わる方々の思いや意識を知るとともに、自分の視野を広げ将来の夢に向けて進みたい道が明瞭になりました。ご尽力頂いた全ての方々に感謝申し上げます。

福島高専 機械システム工学科 1年  
**高橋 那南** Nanami Takahashi

今まで知らなかった、多種多様な場所で福島の復興に向けて、活躍してくださっている人はたくさんいて、少しずつ大きな進化を遂げていたことが身を持って知ることができます。とても刺激的で貴重な経験でした。



HAIRONGA  
HAI RONGA

